

第二の人生語り合う

飯田高校 卒業50周年記念の同年会 第10回卒業生

校の見学や懇親会を通じて級友との再会を喜び合った。

現在、六十八歳前後の会員らは一九五八(昭和三十三年)に同校を卒業した。現役生時代はパンカラの気風が残り、卒業後はほとんどが生徒が都会へ移ってのちの高度経済成長時代の牽引役となった。バブル経済の絶頂期も崩壊後も社会の最前線で体験し「戦争以外はほとんどすべて味わった」。今では第二の人生をゆっくり過ごしている人が大半だという。

卒業二十五周年以来、四半世紀ぶりとなった全体での同年会には北海道から九州まで全国から駆けつけ、半数以上は地域外からの参加だった。母校見

学のあと阿智村の昼神グラントホテル「天心」に移って式典と写真撮影を行い、同期生

で北海道の平岡病院副院長を務める浜島泉さんから「老後の備え『カキケコ』」と題する講演を聞いた。

「母校は全面改築され、当時の面影がほとんど残っていないけれど、どこか懐かしい雰囲気でした」「五十年ぶり、二十五年ぶりに会う友人たちは顔も体型もすっかり変わってしまったが、行き会えてとてもうれしい」と参加者たち。

実行委員会の幹事長を務めた宮澤豊さん(天)「松川町元大島」は「これだけの大同参加は最後になるかもしれないが、母校で再び一緒になれたのがとてもうれしい。六十年間生きてきた中で最も多感な時期を過ごした飯田高校での思い出は、いろいろな困難にぶつかるたびに励みになった」と話し、盛会となった記念同年会の喜びをかみしめていた。



真新しくなった母校の見学を楽しむ